

なぜ私たちは「推し」という言葉を使うのか

川人 彩乃

[指導教員：武庫川女子大学准教授 井上 雅人]

1. 研究の背景

近年「推し」というワードをよく耳にする。古くから日本には「最頂」や「おたく」「マニア」「ファン」といった言葉が存在するが、現在使われる「推し」には、それらには置き換えられない何かがあると感じる。

しかし、私たちが「推し」という言葉を使う反面、いまだに「推し」とは何なのかという疑問は残っている。他に似たような言葉があるにもかかわらず、今の日本で「推し」が使われるのはなぜなのかに疑問を抱き、これを明らかにしたいと考えた。

2. 「推し」について

『名鏡国語辞典』には「推し」は「特に引き立てて応援している人や物。お気に入り。」と記述されている。

「推し」という言葉は、2000年前後女性アイドルが好きな男性たちの間で頻繁に使われていた。「推し」が生まれた当時は、AKB48 選抜総選挙の、「推し」に投票するというシステムが、「推し＝投資」の概念を印象付けていた。

しかし、第4回AKB48 選抜総選挙が地上波で放送されたことをきっかけに、「推し」という表現は大衆化されることになる¹⁾。メディアが「誰を推すか」に注目し始め、「推し＝好きなもの」としてインタビューを行うこともあり、「推し」はアイドルに限らない「好きなもの」として、再定義された。

3. 「推し」の現状

3-1 「推し」の派生語

「推し」から生まれた派生語と、その使われ方を見ることで、現在の「推し」にはどのような特徴があるのかを捉えていく。

一つ目は、「推しが尊い」という表現である。私たちは、「推し」に理想の姿でいることを求めており、プライベートを見ないことや実際触れ合えないなど、「推し」と私たちの間には、見えない壁が立ち、一定の距離が生まれている。

二つ目は、SNS でよく見かける「推し被り×」の表現である。私たちは「推し」から「ときめき」を得ており、この「ときめき」は模擬恋愛の要素となり、こうした恋愛感覚が「推し被り×」の心理を生み出している要因の一つと言える。

三つ目は、「二推し、全推し」という表現である。「推し」は複数人いても良いことがわかる。

四つ目は、「推し変」という表現である。アイドルが「推

キーワード：推し、能動的、水平関係、オタク、コミュニケーション

し変しないでください。」と伝えることは珍しくない。「推す側」だけでなく「推される側」も自身を消費して生活しており、現在両者の関係は、水平関係になっているといえる。

五つ目は「推し活」という表現である。「推し活」には、「推し」の誕生会の開催や、グッズ作成などが挙げられる。「推し」が与えてくれるCDやDVDだけでなく、自ら「推し」の空間を作るなど、能動的に活動することが現在の「推し活」である。

3-2 「推し」と育成

現在の日本は、第4次韓流ブームにあたるが、これに応じてアイドルのオーディション番組が増えている。オーディション番組では、各ラウンドへ向けての過程の中で生じる葛藤にフォーカスが当てられる。久保は「オーディション番組やアイドルや役者に課題を与えて結果をジャッジするような企画や番組は、彼らを育てている感覚を視聴者が模擬体験できる²⁾という。

また、現在の育成ゲームのキャラクターは、細かいプロフィールをもって設定されている。ストーリー展開はいくつもあり、プレイヤーが進めていくことで、どのような結果になるかわからない。このように、2次元のキャラクターでも、育成感覚を楽しむことができる。

3-3 「推し」と社会

私たちは、何度も「推しに救われた」経験をしている。それは、「推し」に直接救われたのではなく、「推し」を通して、本来自分の中にあつた何かが引き出されるという経験である。

また、「推し」がいると、ただの赤い食器だったものが、「推し」カラーの食器に変化し、意味のある食器としてより大切に扱うようになるだろう。社会が彩られるためにも、モノに意味をつける「推し」は大切な存在であるといえる。

4. 「推し」と「オタク」

現在の「推し」に対しての感情や、誰かを応援する人たちは、今まで「オタク」と呼ばれてきた。しかし現在、「推しはいるけどオタクではない」という意見を持つ人がいる。「推し」と「オタク」の違いについて明らかにする必要があるだろう。

4-1 意味と誕生

「オタク」とは、『広辞苑』には「特定の分野・物事にしか関心がなく、その事には異常なほどくわしいが、社会的な常識には欠ける人。」と記載されている。

「オタク」という表現は、1983年に中森明夫によって初

